

ひと呼吸

私たちの日常。それは多くの営みの連なりである。普段、それぞれの行為の意味を考えることは少ないが、ふと立ち止まって考えてみれば、そこには偶然と必然が潜んでいることに気づく。

呼吸。そのような自然な行為ですら、太古における偶然と必然の産物であつたといえるかもしれない。

この「ひと呼吸」が、手に取った人の日々の呼吸（營み）を見つめ直すきっかけとなり、そして、それぞれの日常のなかでの「ひと呼吸（休息と起息）」になれば嬉しい。

#2 OKUYAMA TOSHIHIRO

Interviewer Murata Jun / Text Kitani Megumi



障害者であることの大変さを活かす

村田 奥山さんは時々仕事で一緒にしますが、このように改めてお話をうかがうのは新鮮です。今回は障害学生支援という視点でお話を伺いたいと思っていますが、最近では、私も運営に関わっているAHHEAD JAPAN

の全国大会で、分科会¹の講師をお引き受けいたぐなど、この分野との関わりも増えています。とても素朴な質問になりますが、奥山さんのこれまでと障害学生支

援という分野が交わるようになつたきっかけや経緯ってどのようなものだったんですか？

奥山 僕の場合、最初から障害学生支援に関わると思っていたわけではないし、今でも特に学生だけに関わろうと思つてはいるわけではありませんよ。ただ、自分も当事者として生きてくるなかで、自然に障害分野にも関わるようになつた。その延長で今があるつて感じかな。



奥山 僕は、おもに障害者であることを大変だと感じます。奥山さんは時々仕事で一緒にしますが、このように改めてお話をうかがうのは新鮮です。今日は障害学生支援という視点でお話を伺いたいと思っていますが、最近では、私も運営に関わっているAHHEAD JAPANの全国大会で、分科会¹の講師をお引き受けいたぐなど、この分野との関わりも増えています。とても素朴な質問になりますが、奥山さんのこれまでと障害学生支援

奥山 そうそう。それから、DO-ITを始めるとときにもう一つ考えていたことがあった。エド・ロバーツ²が大学へ進学するときの話

奥山 なんだけど、彼は、はじめてUCIA³を受験したときにもう一つ考えていたことがあります。車いすの人とか障害のある学生たちを既に受け入れていて、環境が整っていたから。車いすの人とか障害のある学生の受け入れという条件を優先して考えるのは、あのロバーツに

とってもあたりまえだったということなんだよね。でも、そのことを進学アドバイザーに

奥山 僕は、自分の立場から見て、車いすの人がどうしてもいいんだよね。

東京大学先端科学技術研究センター
人間支援工学分野
大学院修了後、製造企業に就職。その後「ダスキン障害者リーダー育成海外研修」で渡米し、子どもたちへのICT技術を活用したコミュニケーション支援に携わる。帰国後、退社して自らAT（アシスティブテクノロジー）エンジニアの活動を始め、2002年より現職。障害者が使えるIT等のリソースを掲載した「福祉情報技術（DO-IT）」の編集、障害のある学生の進学を通じたリーダー養成プロジェクトDO-IT Japanに関わる。



DO-IT Japan

援という分野が交わるようになつたきっかけや経緯ってどのようなものだったんですか？

奥山 僕の場合は、偶然アメリカで出会った中邑賢龍先生³が、障害者のコンピュータへのアクセシビリティを保障する電子情報福祉機器の情報誌『こころリソースブック』と『こころWeb』を作り始めていて、家庭教師のような感じでパソコンを教えたり繋がりもできた。DO-IT Japan（以下、DO-

IT）の活動もそこからです。

村田 DO-ITの活動はどのように始まったんですか？

奥山 そもそも、障害のある大学生が少ないのではないかという話がきっかけだね。社会を動かすというか、社会のことを考えるためには、社会のことをじっくり学んだり、考えたりする必要があると思う。でも障害者の場合、大学で学ぶ人が極端に少ない。だから社会が変わつていかないんじゃないかな。

村田 それが90年代の中頃あたりでしようか。日本でも色々な取り組みはあったと思いますけど、そのタイミングでアメリカの様子を見たかった奥山さんにとっては、大きな違いやギャップを感じたということなんでしょうね。

奥山 そう、まだその頃の日本では、障害者が身近にいるとおもしろいなって思つたし、自分がそういう存在でありたいと考えるようになった。

村田 単純なことなんですが、大事な部分です。最近は大学のなかでも支援というものが制度化てきて、場合によつてはその弊害みたいなものも出てきているのではないかと思います。例えば、障害のある中高生が、進学相談のために大学のオープンキャンパスに来る。そこで大学の関係者は支援のことを一生懸命考えようとして、あなたは高校の時にどんな支援を受けてきましたか、大学では何を求めますか、というようなことを質問する。だけど本来は、なぜこの大学に来たいのか、なぜこの学科を選んだのかということのほうが先であるべきですよね。

奥山 そうですね。そこは多くの大学関係者に

もわかつてほしいけど、実は本人にもぜひ考えてみてほしいところ。やりたいことがあるなら、それをやっていく可能性を考えてほしい。やりたいことをしようとすれば、予想以上に大変なことが出てくるかもしれないけど、そうした大変さもある意味で自分の障害を考えるきっかけになるからね。自分のことを考えて自分で選択していくって、簡単なことではないかもしれないけど、とても大切なことだと思います。DO-ITを始める時も、そうしたことをしてしっかりおさえたプロジェクトをやりたいというのが念頭にあった。

村田 エンパワーメントについては、大学としてどこまでタッチしていくか。それを考える時に思うのは、親という存在の位置づけと

いうか距離感ですね。私自身、実際には学生の親との接点もとても多いです。大学でもそうですが、小学校や中学校の生徒の保護者の方々と接する時もあります。実は、そういう場にいると、どこの大学の障害学生支援が良いとか、自分の子どもと同じ障害のある学生がいる大学はどこか、というような質問をされることが多いんですね。気持ちは理解できるんですけど、やっぱり本質ではない気がするし、何より本人の希望とか考えが置き去りになってしまっているようを感じる時もあります。大学の障害学生支援の現場でも、親のニーズや要望にどこまで答えるべきなのか。支援者からそういう悩みをよく聞きますね。

奥山 やっぱり最終的には学生本人に、「あなたはどうしたいの?」って繰り返し聞いていくしかないんだよね。親がいたとしても、本人に聞く。大学からすると親と話し合つたほうが、実際には相談にかかる時間も短縮ですか。支援者からそういう悩みをよく聞きますね。

1 分科会

全国高等教育障害学生支援協議会(AHEAD JAPAN)第3回大会における分科会「ICT技術の活用とアクセシビリティ保障」

- 2 ダスキン障害者リーダー育成海外研修派遣事業
1981年に発足した、地域社会のリーダー育成のため障害のある若者を海外に派遣する制度。
- 3 中邑賢龍
東京大学先端科学技術研究センター教授(人間支援工学)/学際パリアフリー研究プロジェクト(DO-IT Japan)、東大先端科学技術研究センター・日本財團による異才发掘プロジェクト[ROCKET]などの発起人。

4 パリアフリープロジェクト

福島智氏を中心、東京大学先端科学技術研究センターにて立ち上げられたプロジェクト。障害のある人や高齢者を含む多様な人々にとってパリアの少ない社会を構築していくことを目標に、公正で豊かな社会を支えるパリアフリーの理念を、様々な領域の研究の蓄積に基づいて提示するとともに、具体的な問題の解決を当事者の視点から推進していく研究拠点。

5 DO-IT Japan : Diversity, Opportunities, Internetworking & Technology

2007年、東京大学先端科学技術研究センターが主催となる学生の進学と就労への移行支援を通じた社会のリーダー養成プログラム。

6 エド・ローバーツ

1960年代、米国カリフォルニア大学バークレー校に入学し、整っていないかった大学構内や地域社会へのアクセスibilityを求め、自身と同じ重度障害のある学生の中心となって運動を開く。世界で初めて自立生活センターを立ち上げ、障害者の自立生活のシンボルと言われている。

7 UCLA

カリフォルニア大学バークレー校(University of California, Los Angeles)

8 UCBバークレー

カリフォルニア大学バークレー校(University of California, Berkeley)

きるということがあるかもしれないけれど、それは良くないし、たとえ時間がかかっても、やっぱり本人が決めていくということを確保しなくていいわけですね。ぜひそういう大学であったり、支援者であつてほしいなと思う。

大学は人生の一部でしかない

村田 奥山さん自身は、今の状況に対する課題認識であるとか、これからについて、どのように考えていらっしゃいますか?

奥山 教育も大事なんだけど、やっぱり就職や働くことの支援に触れていないかなっていうところもある。もちろん、一般的な就労の形だけじゃなくていいと思うし、極端に言えば自分で起業するなんてこともあるかも知れない。

奥山 確かにそうですね。既存の状況にどのように入っていくかということだけではなく、多様性も大事ですよね。でも、実際にはまだまだロールモデルが多くないという感じもします。



奥山 多くないよね。筋ジス、筋疾患などで、電動車いすに乗っている学生たちは、DO-ITの最中では様々に発言して活発だなあ、たくさん新しいあと感じっていても、就職の段階になるととたんに厳しい現実を突きつけられる。実際、社会に出ることのハードルが小さくなっていることだよね。そこは、社会全体として考えなくちゃいけない課題。ただ一方で、入試制度が整ってきたから、大学へのルートというのは、以前に比べれば広がってきた。それはすごくポジティブなことなんだけれど、その反面、学生が現実を知つて苦労する中で、それをどうクリアしていくのかということを考える機会が少なくなっているような側面も出てきた。時間がかかるかもしれないけど、ときにはしっかり立ち止まって考えないと、自分の人生を生きられないということとも起こってしまうかもしれない。

山さんの話のよう、普段たくさん考えたり、しなきやいけないことがあるけど、それだけで疲れてしまつてしまうんではなくて、大きな仕事が終わつたら旅行に行つてしまつてもいいし、別に365日一心不乱にやることが良いわけでもない。「ひと呼吸」は、この分野に関わる人に焦点をあてているんですけど、うまく息抜きもして、みんなで考えるときはしっかりとやつていうよつていう機運もつくり返る時間があるから。

奥山 大学の支援では、ひとつ間違えると「困っている学生」として障害学生を捉えて、われわれが何とかするんだという保護的な関わりになつてしまふ。必要な支援はちゃんと考へていかなければダメだと思いますけど、むしろ彼らに近い存在として大学の教職員自身が、彼らの刺激になつていくぐらいじゃないといけないなと思います。

奥山 そういって思つてゐるんです。

奥山 そうだね。みんな不安な部分もあるけど、そんなに不安ばかり感じていてもしようがないしね。とりあえず、自分がいいと思ふことがあれば、まずはなんでもやつてみたらいい。そういうことを学生たちに伝えたいかないといけないよね。

奥山 そうだね。みんな不安な部分もあるけど、そんなに不安ばかり感じていてもしようがないしね。とりあえず、自分がいいと思ふことがあれば、まずはなんでもやつてみたらいい。そういうことを学生たちに伝えたいかないといけないよね。

奥山 そうだね。それは僕らも同じ。もううまく動けないときがあるなら、すぐに答えがでなくとも、少し立ち返つて悩んでみるっていうことを選んでみてもいいと思う。それはきっと必要な時間つていうことだよね。



Editor's Note

奥山さんとお話しするのは初めてでした。にもかかわらず、いきなり立川にあるご自宅訪問で、少々緊張しながら村田さんがインタビューしている周りで写真を撮り続けました。明るいペランダからは多摩川が見えたと思います。相模原も。1970年代に始まった障害者の自立生活運動は、このあたりで活発に展開されました。私も十年ほど前に、重度訪問介護の資格をとるためこの地にやって来たことがあります。そのときも、重度の身体障害の方が暮らす団地の一室にうかがい、ご自身が関わってこられた運動の話や普段の生活の話を聞き、私の知っている一人暮らしとの違いに衝撃を受けたことを思い出しました。奥山家にも、当たり前ですが、奥山さんご一家の生活が確かにありました。それをわざわざ「自立生活」と呼んでしまっていいものか、もっとお話を聞きたいところですが、でもやっぱりそうだったのだろうと思います。自立生活運動の始まりから40年以上が経ちます。インタビュー記事を書きながら、いまでもわざわざ「自立生活」と言い続ける必要があるんだということを考えました。そして大学で学ぶことも、そうした自立や自由を謳歌することにつながっていけばいいなと改めて思いました。

(木谷恵)

Concept

障害のある学生が高等教育にアクセスする権利を保障するための取り組みである「障害学生支援」には、その主人公である学生と対話し、ともに行動してきた多くの実践者たちの存在があります。こうした実践者一人ひとりには独自のバックグラウンドがあり、またそれぞれの考え方や想いをもって形作ってきた歴史があります。

私たちは、これらの「人」によって蓄積されてきた考え方やその想いを知ることが、これから障害学生支援を考えいく上で貴重な機会となり、この分野の魅力を知ることにつながると考え、この『ひと呼吸』を発行することにしました。ここに綴られているのは、私たちを含めた一人ひとりの関係者にむけた応援のメッセージです。

ひと呼吸・編集委員会（HEAP×Kyoto Univ.DSO）

村田淳、船越高樹、宮谷祐史、木谷恵

HEAP：高等教育アクセシビリティプラットフォーム

Kyoto Univ.DSO：京都大学 学生総合支援センター 障害学生支援ルーム

発行／高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）

Address 京都市左京区吉田本町

京都大学学生総合支援センター内

Web <https://www.gssc.kyoto-u.ac.jp/platform/>

Mail d-support-pfm@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

Tel 075-753-5707